

リレートーク【1】

北陸職業能力開発大学校附属新潟職業能力開発短期大学校 村尾 欣一

## 卒業生の活躍に思う

バトンをもらった亀田君は住居環境科8期の卒業生で、小説家藤沢周平の故郷山形県庄内平野の出身。氏の小説「義民が駆ける」に登場する農民を感じさせる風貌をしていた。小説の話は越後長岡に転封される領主の藩制を守るため、各地の農民が江戸の老中に直訴のため、山奥から命がけで次から次に仲間を送り込み、ついに阻止をするというストーリーなのだが、彼は登場する農民に似た根性を感じさせる。それは、卒業し近くの土建会社に就職した。中小企業家同友会に所属した経営者はゼネコンの下請けながら、地域の住民の利益をトコトン守ることを社訓とし、積極的に地域のボランティア活動に取り組む個性的な企業だった。しかし入社3年目に倒産し彼は失職した。ところが苦境のなか広域事務組合の消防士ポストを一年がかりで獲得する。これは前職で経験したボランティア精神をより日常化する一歩先の職種だった。「当面は救急救命関連の資格と、いずれは消防法に関する建築確認業務にかかわる専門職としての資格を取る」と、その次の展望を淡々と語る。困難を好機とやり抜く、小説に登場した庄内の義民根性を受け継いだ男なのだ。

亀田君の同級生であるT君は、入学当初「どこの出身？」と問われると「スズシイです」??「涼しい処ってどこ…?」。何回かの問答を経て、能登半島の先端、<sup>すずし</sup>珠洲市の出身と理解させる。一度聞けば忘れない男だった。入学当初、将来は住宅の設計監理をする希望を持っていたが、味のある古典的な木造住宅は、設計者でなく大工職人の手で造られることを知る。そして就職先に伝統木構造を継承した大工の弟子を選んだ。携帯電話禁止、12人家族の中で住み込み4年、年季明けまで小遣い程度の給料という最悪の徒弟環境に身を置いた。たまに作業場を訪ねると、マサカリを使い1週間梁殴りをしてい

たと言い、手のヒラを見れば豆が3重にもできている。この根性はどこから来るのだろう…感心とともに胸が痛み、頭が下がる。卒業して7年、土台の墨付けから始まり、柱、小屋、今は梁と、もう少しで1軒全部の墨付けができるところまで来た。10年を目標にやがて資格を取って故郷に帰り、独立を目指している。

卒業生はこの2人に負けず劣らない強烈な個性を持った学生が毎年何人か居て、学ぶべきことが実に多く、彼らによって短大も私も支えられてきたことをしみじみ実感する。この3月には15期生が卒業し、これまで300名を超える卒業生がそれぞれの置かれた環境でしっかり生きている。

—昨年からの嘱託として勤務している私は、彼らに出来る限りの支援を送りたい。

今回のリレートークは、総合大東京校に勤務されている秋山先生にお願いしたいと思います。秋山先生とは同じ建築系ということで実践教育訓練研究会という場で知り合い、親交を深めてきました。それでは、よろしくお願いたします。



新発田市名所となった桜咲く新潟校正面玄関